

---

# NEO WORLD

AGE

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

NEO WORLD

### 【コード】

N6019C

### 【作者名】

AGE

### 【あらすじ】

記憶を失った者の進むべき道とは？混乱の世界で自分を見付ける為の冒険が今、始まる。

## 『罪とX』

眼が覚めると其処は見覚えの無い部屋。  
横になる身体を起こし周囲見渡すも寝かされていたベッドと自分しか無かった。

此処は何処なんだ？

部屋の壁に一つ扉が有る。

ベッドから降り床に脚を付けて扉へと歩み寄るがロックされているらしく何の反応も無い。

何も無い空間。こんな場所で自分は何を？

自分自身に問い掛ける。

だが答えが見付かる事は無かった。

やはり自分は此処に来た覚えが無い。

誰かに連れて来られたのか？

再びベッドに戻れば静かに腰掛け額に掌を添える。

何故だろうか、記憶がはつきりしない。

此処に居る経緯もそうだが、記憶を辿る内自分が何者なのか曖昧だった。

名前すら思い出す事が出来ない。本当に自分に名前等有ったのかと

疑いたくなる程に、記憶の大部分が失われている。

記憶喪失だろうか？

一時的なものであつて欲しいと願いながらも他に何か記憶に情報は無いかと瞳を閉じ、脳内を探る。

！？

突然頭に激痛が走った。

何か、大切な事が記憶が有る筈。

それを思い出そうとした瞬間、身体が抵抗する様に痛みを生んだ。

すぐに痛みは治まるも再びその事を思い出そうとすれば頭痛が起こるのだろう。

何なんだ…一体…？

悲痛な呟きと同時に反応の無かつた扉が機械的な音と共に開いた。突然部屋に響いたその音に僅かに身体反応させ警戒の視線向ければ、扉の先からやはり見知らぬ人物が現れる。

そして一言。

「眼、覚めました？」

問われた言葉に反応する事無く相手を見詰めた。金髪の髪は長く、白衣を身に纏っている。声質は女性の様だったが中性的な顔立ちの為に性別は分からなかった。

視界に移る相手は反応の無い此方を気にする事無く話しを続ける。

「気を楽しにして貰って大丈夫ですよ？僕は別に貴方に危害を加えるつもり、無いですし。」

微かな笑顔向けられ告げる言葉からは確かに危険な雰囲気は無い。だが素性の分からない人物に気を許せなどそう簡単には出来ないだろう。

「お前…誰だ？」

この空間で初めて口にした言葉だ。表情も変える事無く問う此方の返事に相手は素直に口を開く。

「名前ですか？僕はルルー、此処の主です。この辺りじゃ結構名前知られてると思うんだけど…知らないですか？」

ルルー…聞き覚えの無い名前。

まして記憶が曖昧な自分に何を問われても分かる筈は無い。

「すまない…記憶がはっきりしない…」

額押さえ此方が告げると相手はその事を把握していた様に動揺する事無く静かに頷いた。

「まあ良いです。僕の事を知らなくても君は困らないと思いますし。」

やはり敵意は感じないものの、再び向けられたその笑顔からは何か不思議なものを感じた。

「俺は…一体何故此処に居る？」

ふと相手に向ける漠然とした言葉。

記憶が無い、それは得体の知れぬ孤独を生み出し不安が身を包む。自分すら知らぬ今の自分は、自らの事を把握する事が必要だった。此方の問いにルルーが口を開く。

「えーと…君はこの施設の前で倒れていたんですよ？僕の部下が発見した君をこの部屋に寝かせておきました。」

勿論この話しを聞いても記憶は戻る事は無かった。故に何も得られないものは無い事を前提に聞いている。続く話しに静かに耳を傾ける。

「残念ながら君が何者なのかは分かりませんが、…君の事、寝てる間に少し調べさせて貰いました。…あ、別に変な事してないですから安心して下さいね？」

調べた？

何を勝手に、と普通の人間ならば怒鳴りつけり者もいるのだろうか今の自分にはその言葉に感謝したい。勿論ルルーの「当然」のような言い方には驚きを隠す事は出来なかったが。

「…で？」

表情には出さぬも微かな期待を胸に一言だけ問い掛ける。ルルーは微かに躊躇うように間を開けて口を開いた。

「実は君を保護したのには理由があります。勿論善意からの行動で

も有りませんが：君の傍らに此が落ちていたんです。」

そう語ると彼は白衣のポケットから徐に掌に収まる程の大きさの十字架を取り出した。

「この十字架はX本部所属クロスの証です。此の隣で君が倒れていた訳で…もし君がXに居た人物のなら、と興味が湧きました。」

X？説明も無く話を進める様子だとその名前は一般に知られているのだろう。

そんな事すらも思い出せぬ自分にもどかしさを感じる。

此方の様子に記憶が無い事を思い出したようにルルーは言葉を繋げる。

「Xというのは…この世界を守護している者達の事です。彼らの働きのお陰で此迄世界の治安は保たれ、民は平和に暮らす事が出来ていました。」

と、ここ迄は過去の話。

今現在の彼らはある出来事を境に変わってしまったのです。」

この話が自分にどう関わっているのか分からない、しかし今は静かに続きに耳を傾けるべきなのだろう。

「その出来事の数日後の事。彼らXの行動は一変、突然にX本部近辺の街の民を捕らえ本部へと連行、激しく抵抗する者はその場で命を奪われました。」

深刻な表情で発せられた内容は初めて聞いて直ぐに理解するには不可解だった。

Xという正義の味方が居るとして、何故突然に今迄守り続けてきた民を恐怖に陥れる必要があったのか。

それは多分、『ある出来事』が鍵を握っているのだろう。

「勿論その街は壊滅。逃げさせた者も居るようですが…それはほんの数名だけ。連行された民もその後X本部からは誰も戻る事は無かったそうです。本部内に入れる人間は関係者のみ、故に誰も本部で何が行われているのか知る者はいません。」

しかし不思議な事に彼らはその事件以後、本部から姿を現していないです。本部周辺を警備する者だけなら姿を確認出来た者も居るようですが…話など聞ける筈がありませんし、また何時彼らが動き出すかも分かりませんから不用意に近付けません。」

未だ真相が明かされる事のない話の内容は理解するだけで大変なものだ。

今の世界の状況を認識しておかなければならないのは分かっているが、普通では異常なこの話を聞くにつれ謎が増えるばかり。耐えきれず問い掛けてしまった。

「『ある出来事』とは一体何なんだ。悪魔にでも取り付かれたと言うつもりじゃないだろうな？」

此方が口を開くとルルーは静かに頷いて見せた。静かにそして此方を見詰め返す。

「悪魔：確かに悪魔なのかもしれません。実はその惨劇の幾日前に自ら『神』を名乗る人物が現れたらしいです。何者かも分からぬ者であるにも関わらずX本部の人間は何故か彼を疑う事無く極秘である筈の本部内へ招き入れました。その後は話した通り。…彼があの事件に関係している事は間違い無いと僕は考えています。」



『神』と名乗る者。

一体この世界に何が起きているのかは知らない。しかしルルーから聞いた話によればXが活動停止している時点で今の世界の状況は危ないのだろう。

「つまりこの十字架を持っている時点で危険な人物となる…か。」

ルルーの持つ十字架を見詰め、呟いた。

記憶がない故に自分が何者かは分からない。しかし可能性からいけばそのXという名の団体に所属していた、という説が有力だろう。それは同時にルルー達のような民にとって危険な存在となる。

ルルーは手に持つ十字架を此方に差し出し、優しい口調で語る。

「心配しないで下さい。確かに君はX本部に所属していたのかも知れない。しかし今の君には記憶が無い、つまり少なくとも街を襲撃した者達のような残虐な心は無いという事。…この十字架は君の物です、持っていて下さい。」

ルルーの表情は穏やかであり、彼のその言葉は理解出来ないながらも微かな不安を感じていた此方の心を落ち着かせてくれた。

差し出された十字架を受け取るとルルーは何か思い出したように折り畳んだ紙を取り出し、それを此方に渡す。

不思議そうにその紙を受け取り中を開けると何かが書いてある。

「…ルルー…レイン…？」

聞き覚えのある名前がそこに有る。そして続いている文章に目を通

していると目前の彼が此方の言葉に反応するように答えた。

「アルバート・ルルーレインは僕の本名。長くて呼びにくいので皆にはルルーと呼んで貰っています。しかしそんな事はどうでも良い事。その紙は君を安全な人物だと保証する物、身分証明書と違って構いません。」

手に取った身分証明書代わりの紙を見詰めながら耳を傾ける。

「僕はこの施設にずっと居る訳では無いですし、君を此処に居させる訳にはいきません。そこでなのですが…この先、丁度南の方角に向かうと小さな町があります。その町にはXに詳しい僕の友、シールという老人が住んでいる筈。保証は出来ませんが彼なら君の事を何か知っているかもしれません。勿論強制する訳では有りませんが…しかし少なくとも宛無くさ迷うよりは良いと思います。」

確かに彼の言う通りだとは思うがこの佻彼に従うように道を選んでしまっただけだろうか。足らぬ情報からこれからの道を考えるもやはり宛無く広大な大地を歩く事は命に関わるだろう。彼の判断は懸命だとすぐに思い知らされる。

「各街はあの惨劇が起こってから閉鎖的になっていますから怪しい者は街には入れない筈…シールの元へ行かないにしろ君の身分を証明する為にその紙は役に立つ筈です。」

持っただけでも邪魔にはならないだろう。

身分証明書の大変な役割を得た紙もこの唯一の手掛かりの十字架も共に大切にしなければならぬ。

しかしこのルルーという奴…この紙の内容と今の話が嘘ではない限

り余程の権力を持っているか余程民に信頼されているのだろう。  
しかし不自然な点が否めない。

「そこ迄して何の利益が有る？記憶喪失の本来敵かも分からない奴  
を軽々しく保証するなんて……」

疑いの瞳をルルーに向ける。

きつと何か理由が有る筈、それを聞き出せなければ素直に彼の言う  
通りには動けない。

保護して貰い感謝はしているがやはり彼が自分にとって敵か味方が  
を見極める必要が有るだろう。

「君に興味があった、それだけです。Xの人物と話せる機会は今で  
は滅多に有りませんから詳しい事が聞けるかと。……まあ記憶が無い  
のは予想外でしたけどね。それに僕は困っている人を見捨てる事が  
出来ないだけですよ。」

此方の問い掛けに動じる事無く微かな笑みを浮かべ彼は答えを返す。  
その笑みからはやはり不思議な雰囲気が漂っていた。

人が良い、と言うってしまえばそれで納得出来てしまう答えだがど  
うも引つ掛かるものが有る。

しかしそれが何かは分からない。

もしかしたら消え去った記憶にはこの人物と面識が有ったのかもしれ  
ない。

今はルルーを信じる事しか出来なかった。

『罪とX』（後書き）

第1章、どうだったでしょうか？

今回初めて小説（と呼べるか分かりませんが…）を書かせて頂きましたAG Eと申します。ほぼ初心者なので文章等が滅茶苦茶かと思われませんが読んで頂き本当に有難う御座いました！

図々しいようですがもし宜しければ感想やアドバイス等頂けたら励みになります！

## 旅立ちの朝

外の世界は広大な大地が広がっていた。

見渡す限りの自然の風景。

青い空。鮮やかな緑の草木。心地良い風。

全てが新鮮に感じられたのは記憶が曖昧なお陰なのだろうか。

ルルーの施設を出たのが早朝なのだがもう太陽は低く日が落ちかけている。

結局行く宛が無い為に素直に彼の言葉を信じる事にしたのだが…本当にこれで良かったのかは分からない。

ただ分かる事は、今の自分は自分以外の誰かに頼るしか道は無いという事。

しかし丸一日程歩き続けたにも関わらず視界に映る景色には町など見当たらず、ただ闇雲に前に進んでいるだけの様な気がした。

不安を抱き次の一步を躊躇ってしまう。

この俣町に着けなかったとしたらどうする？

要らぬ恐怖が身体を支配する。

俺はまるで急ぐ心を抑えるように歩み続けて来た足を止めてしまった。

懐に閉まった十字架を取り出し見詰めると恐怖に怯えた俺の瞳が映っている。

「もう直ぐ日が暮れます。体力回復も兼ね暫く休憩した方が良いと

思いますが？」

「あ…ボクも賛成です…お兄さんも大分お疲れの様ですし…」

足を止めた俺を気遣って言ってくれている事は理解していた。

だが不思議と他人にそれを指摘されると無償に反発したくなる。

誰が休むものか。

結果的に彼らの言葉に後押しされる様に無言で止めた足を再び一歩、  
また一歩と踏み出す。

「あ…置いてかないで下さいー…！」

「強がる必要は無いと思うのですが…」

「いくら身分を証明するものが有っても記憶が無い君が道中独りで  
行くのは危険である事に変わりません。そこで、なのですが…僕の  
助手の一人を護衛として連れて行って貰う事にしました。」

Xの話聞いてからルルーの所で一晚を過ごした。そして朝方旅立  
つ寸前、施設の前で彼に呼び止められ護衛の話が聞かされた。

正直護衛など必要は無い。

危険ではないという根拠は無いが一番の理由は1人の方が気が楽だ  
つたからだ。

しかしルルーは此方の答えを待つ事無く話を進めている。

そして彼の隣に一人の女性が姿を現した。  
彼女は此方を見詰め淡々と告げる。

「『ユメ』と言います。貴方を必ず無事町迄お連れしますので御安心を。」

肩位迄の長さの赤髪で背中に刃を携えている。目を怪我しているのか片目に包帯を巻いている。故に片目で此方を見ている訳なのだが相当の戦闘経験が有るのだろうか、その瞳は人の心の中迄も見据えている様だった。

「待ってくれ。俺は一人で行ける…護衛は要らない。それに親切なのは分かるがそこ迄して貰う必要は」

「僕達の為に護衛は必要なんですよ。」

此方が拒もうと告げる言葉に割ってルルーが俺の言葉を否定する。  
僕達の為？どついう事だろうか。

不思議そうな表情を見せると彼は苦笑を見せ話を続けた。

「何か勘違いなさってますんか？彼女が護衛するのは君じゃなく、君の持っている『紙』ですよ。町迄は結構な距離が有りますから…万が一君が行き倒れ何処かの民に発見された場合、君の持つ十字架と僕の名前と筆跡の有る紙が見付かったらどうなるでしょう？」

一体何が有るといふのか。突然の問い掛けに検討も付かない。

此方の答えを待たぬ俣ユメと呼ばれた女性が口を開き、表情を変えぬ俣告げる。

「…ルルー様がXと関係が有るのだと疑われる事になります。そう

なった場合、ルルー様が今迄築き上げてきた民からの信頼が崩れてしまう。」

ルルーが一体どれ程の人物なのかは知らない。しかしその言い方を聞くと余程の人物なのだと感じさせる。

それは彼女が『様』付けで呼んだからなのかも知れないが。

確かに理由は納得出来るが少し警戒し過ぎではないのか？そこ迄して俺を町に行かせる理由：やはり何か引っ掛かる。

心ではそう思いつつも、問い詰める事は出来なかった。

今その『何か』を聞いたとしても町へ行くしか道は無いだろうから。

「…勝手にすれば良い…」

もう何を言っても無駄だろう。

そう思い彼らに一言だけ告げ背を向ける。

「因みに、ですが…不用意にその十字架を民に見せない方が良いでしょう？Xの一員だと思われ襲われてしまう。」

ルルーが俺の背中に思い出した様に告げる。今頃言う事では無いだろう、そう感じたが理解する様に一度頷き、踏み出す。さっさと町迄行ってしまおう。

そうすれば少なくともこの女とは別れられる筈。

広がる大地に向かって歩を進めようとした瞬間だった。

「…あの…すみません…」

ルルーでもユメでも無い、別の声が聞こえる。とっさに振り返り声の主を見遣るとそこには華奢な体格の男が居た。駆けて来たのか少し息が上がっている。



「おや？テツ君、何かありましたか？」

テツというのが彼の名前らしい。見た目は少年と言った所か。目に付くのは深く被った帽子と口元を隠すマスク。彼自身がボソボソと喋るのに加えそのマスクのお陰で彼の声は聞き取り難かった。ルルーが問い掛けるとテツと呼ばれたその少年は遠慮がちにルルーを見、告げる。

「あ…えーと…もし良ければ…なんですが…ボクも同行させて貰えないでしょうか…？」

ルルーが戸惑いの表情を浮かべている。

当たり前だろう、きっと彼はルルーの部下なのだろうが突然現れて何を馬鹿な事を言うのだろうか。

同行、という事は俺と共に町迄行く事になるだろう。只でさえユメと呼ばれた彼女が同行する時点で迷惑だと感じているのに、もう一人付いて来る等冗談じゃない。

勿論ルルーは断るのだろう。

そう思っていたのだが。

「…そうですね…良いでしょう、護衛頼みましたよ？テツ君。」

暫く考える様子を見せるも、ふとルルーが笑顔で一言。

馬鹿な！冗談じゃない、面倒が増えるだけだ。俺は驚きを隠せずテツを視界に映す。彼は嬉しそうに目を細めながらルルーに頭を下げ礼を告げていた。

そして此方に向き直れば彼は再び頭を下げる。

「…テツって言います…宜しく御願いますね…お兄さん。」

助けを請う様にルルーを見るも笑みを浮かべた俣で此方の話を聞いてくれる気は無いらしい。

ユメを見れば彼女は瞳を伏せ何も気にする様子は無い。

一応抵抗はしてみようと思いい口を開いたのだが、言葉を割って溜め息が出る。

ふっ、と張り詰めていた気分が和らいだ気がした。溜め息のお陰なのだろうか？

しかし又疑問が増える。何故テツは突然同行する等と言い出したのか。

そして何故それをルルーは反対する事無く承諾したのか。

このルルーという奴が更に分からなくなった様な気がした。

もう気にするだけ無駄か。

これ以上此処で時間を無駄にしても仕方無い。誰が付いて来ようと俺は町に行く事は変わりはないのだ、それに別にユメとテツを気にする事も無いだろう。

俺は一人だと思えば良いのだから。

俺は改めてルルーに背を向け、未知の世界へと踏み出した。

勿論背後からは二人分の足音が付いて来るのだが。

## 旅立ちの朝（後書き）

以上第2話でした。

前回よりも大分短くなってしまいましたね…そこは多目に見て下さいね？

分かり難い部分等あれば気軽に指摘してやって下さい！

## 俺とテツとユメと

落ち掛けた太陽は既に沈み、周囲は闇に包まれていた。

月の光が微かに照らす大地を見渡せば何処かもの寂しく感じる。

道の傍らに生えていた一本の木が更にそれを強調していた。

歩き続けている為か睡魔には襲われる事は無いが、やはり朝から晩迄歩き続けていると疲労が溜まっているのは明らかだった。

只でさえ昨日の夜迄眠り続けていた為に身体が鈍っている感覚が有る。更に日中の日差しに地味ながらも体力は奪われ、夜の急激な気温の変化に耐えれず身体が休息を求めている様だ。

しかし背後の二人の言葉を見視し歩き始めた手前、再び足を止める事はどうしても出来ないだろう。

さっき視界の先に見えていた一本の木を通り過ぎる。まだ此だけしか進んでいないのか…。

彼らは俺に確りと付いて来ている。

ユメは与えられた任務に忠実なのかただ無言で足を進めている。時折此方の身を案じてか休憩を持ち掛けて来るが、俺はそれを断り疲労を隠しながら歩く。

最も彼女は此方が体力の限界に近付いている事を理解しているのだろうか。

思いの外彼女は此方に気を遣っているようだった。流石はルルーに選ばれた人物という事なのだろう。

問題は彼女じゃない。

「…あのー…やっぱり休みませんか…？そんなに急いでも…無駄に

体力消耗するだけ…ですし…」

何なんだこの男は。

初めは彼も俺の事を気遣って休憩を勧めてくれているものだとばかり思っていた。しかし進むにつれ彼からの言葉が発せられる頻度が増え、日が落ち掛ける頃には自分が疲れたから休みたいと言わんばかりに告げられている。

背後からそんな言葉を投げかけられ続けるのは迷惑極まりない。何故こんな男をルルーが同行させたのか本当に分からなくなってくる。

そんな事を思いながら彼の言葉を無視するべく無言で進もうとしたのだが…突然ユメの声が響いた。

「テツ、貴方が何の為に私達に付いて来たのかは知らないけれど…それ以上弱音を吐き続けるつもりなら此処に置いて行くから。」

「え…？あ…ごめん…なさい…」

そのやり取りに違和感を感じ振り向けばユメはテツを冷たい視線で睨み淡々と言い放っていた。

その言葉を聞いた彼の表情はマスクで確りとは確認出来ないものの視線を逸らしたその瞳は微かだか悲しそうに見えた。

そのやり取りが初めての彼女達の会話だった。ルルーの下での彼らがどのような関係にあるのかは知らないが決して仲が良いとは思えない。

かと言ってルルーがテツの同行を許したのを考えると仲が悪い訳でもないのだろう。

「…さあ、先に進みましょう。休憩を取らないのなら足を止める意味等有りません。」

何事も無かった様にユメは此方に向き直り言う。俺は知らず知らずの内に足を止めていたらしい。

謝罪を告げたテツは下を向いた俣肩を落としている。余程彼女の言葉が効いたのだろうか？何にせよこれ以上無駄に休憩を迫る事は無いだろう。

俺は彼女に促される様にまた一歩一歩足を進ませると突然、次は俺に向けユメが歩きながら言う。

「彼の言葉は気にしないで下さい。」

「あ…ああ…」

戸惑いながらも返事すれば彼女は視線を進行方向にやりそれ以上何も言わなかった。

そこ迄言われる彼が流石に少し可哀想に思えたのだが俺が口を挟むべき事ではないな、と先程迄と同じく黙々と進む。

先頭は俺、次いでユメが後に続き最後尾にテツがトボトボと歩んでいる。

初めて彼を見た時から比喩物にならない程元気を喪失していた。まるで子供の様だ。

それから暫く進むもやはりまだ町は見えない。今更だがルルーが距離が有るとは言っていたがまさか1日歩き続けても到着しないとは

…。

「…あの…」

食料等はルルーから譲って貰えた為空腹に苦しむ事は無いし適度な水分補給も出来ている。問題はやはり俺の体力か。初めに比べ歩く速度は大分遅くなっているだろう。早く進もうとするがやはり身体が追い付いて来ない。そう考えると俺の背後で疲れた様子を見せない彼女は優秀は人物なのだと改めて感じる。

「…えー…と…」

俺の速度に合わせてついて来るのが楽なだけなのか？だとしたら俺は自分の記憶には無いが余程体力が無いのだという事になる。

俺はその事を認めたくない一心で歩く速度を微かに上げる。本当に微々たるものだったのだが。

こんな意地が張れるのならまだまだ行ける、と俺は内心で呟いていた。

ふと背後の足音が消えた。

不思議に思い振り返るとテツが足を止めていた。多分彼に釣られてだとは思うがユメモテツの後方で立っている。

何なんだ、一体？

そう感じながら彼らに視線を向ければ周囲に気を配っているのが理解出来た。

「おい…どうかしたのか？」

俺はどちらにともなく質問する。  
するとテツから理解し難いその理由が告げられた。

「あの…さっきからボク達…監視されてます…」



## 『アンノウン』

監視されている？

その言葉は俺にとつてとても衝撃的なものだった。

周囲を見渡せど誰も居ない。勿論深夜の闇に包まれ近辺には林等身を隠す場所が有る。が…万一ずっと監視されてきたというならば日が落ちる前にユメがその事を告げる筈だろう。

今になってテツが監視の事を告げた訳は一体何なのだろうか？

「…一体誰が監視してるって言うんだ？俺達はルルーの所を出てから他の人影を見ていない。それに此れだけ時間が有ったんだ、普通なら明るい時間帯に気付くだろう…まさか冗談じゃないだろうな？」

俺の考えをテツに投げかける。微かな疑いを持って告げたその言葉にテツは不満気に視線を逸らす。そして俺に続きユメが一言。

「嘘では無いですよ。私も先程から何か不快な感覚を感じていました。が…まさか監視されているとは…」

テツが微かに嬉しそうな表情を見せる。残念だが監視されているのは事実らしい…が、何処にそんな人物が居るといふのか。

得に同様する様子を見せない所を見るとどうやらユメは既にその存在には気付いていた様だ。しかし相手の場所は把握出来ていないらしくしきりに周囲を見渡している。彼女を欺く者とは余程身を隠す事に優れているのだろう。

ふと視線をテツに戻せば彼女とは違い、彼はただ一点を見詰めていた。

どうやら彼には監視する者が誰なのかを理解しているらしいが…話が唐突過ぎて頭が混乱してくる。

ユメもテツの視線に気付いたらしくその方向を見遣る。  
微かな恐怖感はあるものの俺も彼女に促される様にその視線を辿りその一点に眼を向けた。

テツが静かに告げる。

「お兄さんには…見えない筈…です…だって…」

俺が視界に捕らえたのは暗闇を照らす天の月。瞬く星が俺達を見下ろしている。眼に付くものはそれだけだった。

冗談じゃない、監視されているというのは星や月に見られているという事なのか？子供の夢の話じゃないか、そんなもの。  
溜息一つ、緊張に強張った身体から一気に力が抜ける。

文句を言おうとテツの方に視線を遣ろうとすると、未だ一点を見詰めるユメの姿が見える。

彼女は俺とは違い呆れた表情ではなかった。

何処か意表を突かれたように眼を見開いている。テツも矢張りその一点を瞳に映していた。

何なんだ一体？彼等には何かが見えているのか？だとしたら一体何が？

俺には見えぬものが其処に有る。いや…居るのかもしれない。

「君の実態は…そうか…だから…」

彼は何か意味が分からない事を告げている。

その内容は誰かと会話しているようだ。つまり其処にやはり生物が居るといふ事になるのだろう。

「だから私は気付く事が出来なかった訳か…全く…」

ユメはユメで独り納得する様に呟いている。微かな笑みを浮かべ意味深な事を口走る姿は何も見えていない者からすると不自然極まりない。

俺はその立場に耐え切れず問い掛けた。

「お…おい。一体何が如何なっているんだ？其処に何か居るのか？そいつが俺達を監視していたのか？」

今、俺の頭の中に在る疑問を全てぶつける。

人というのは自分の理解出来ないものが有ると不安を覚えるものだ。俺の心は不安で一杯だった。先程緊張が解け楽になった身体も既に再び緊張に包まれている。

「お兄さんは…純粹ですから…見えないんですよ…。此処に居るのは…D25…プルメリア…です。」

「Dシリーズ。こんな場所で遭遇するとは思っていませんでした…」

テツの言うプルメリアというのが彼等が見ているモノの名前らしい。D25というのは…ユメの言葉からするに何かの番号なのか？

存在は分かったが状況は先程と全く変わっていない。

どんな容姿で、どんな大きさで、どんなモノなのか？それが知りたいが…。

「彼は…危害を加える様な事…出来ないのでから…安心して下さい…」

テツが此方に視線を向け、今まで見ていた一点を指差し言う。

多分俺を安心させようとしているのだろうが自分で安全を確認出来るまでは信用出来ないだろう。

「一体その…プルメリアという奴は何なんだ？何故俺は姿が見えない？」

安心などとは程遠い、少し苛立った口調で乱暴に問う。

テツは俺の様子に視線を逸らす。少し強く言い過ぎたか？しかしそんな事を気に出来る程、俺は落ち着いては居なかった。

そのやり取りを聞いていたユメが、相変わらず一点を見詰めながら淡々と答え始めた。

「DNo.25 プルメリア …簡単に言えば人の姿を模したエネルギー体です。人を模しているだけ故に言葉は喋れませんしエネルギーの塊なので人には確認する事が出来ません。勿論彼等も人には干渉する事が出来ません。エネルギーの強い者は稀に人の眼にも留まる事が有りますが…それらを見たかつての人類は「幽霊」や「霊体」等と呼んでいました。今では研究も進歩し彼等の存在も正式に確認されましたが何故エネルギー体が意思を持っているのかは今の科学では立証出来ていません。」

人が変わった様に彼女が告げた専門的な内容に微かに驚いたが、本当に驚いたのはその内容だった。

エネルギー体など理解出来る筈が無いだろう。しかし確認されているという事は実際に居る事が証明されたという事。つまり確実に其処にはプルメリアというエネルギーの塊が居て、俺を見ているのだ。かつての人類が「幽霊」を恐れていたのは知っている。

まさに今、俺はその恐れを感じていた。しかし恐れている場合では無い。

「な…何の為に俺達を監視していたんだ？」

得体の知れぬエネルギー体に問い掛ける様に宙に投げかける。  
勿論返事は無い、そんな事は分かっている。代わりのテツが返事をした。

「彼等は…この周辺を…住处としている…様です。…何かボク達が…危害を加えないか…監視していたのだと思います…」

監視の理由は単純なものだった。それが本当ならば俺達に直接関係するモノでは無いという事になる。…監視というから何か敵対する者が居るのかと思っていたのだが考え過ぎだったらしい。

「つまりこの周辺にはそのプルメリアと呼ばれるエネルギー体が沢山居るって事か…全く、驚かせる。」

周囲を見渡せど誰も居ない場所に何かが居るとするのは気分が悪い。だがそれがこの世界で普通の事だというのはなら不安がっても居られない。

俺の記憶が無くなる前まではこんな事は普通だと感じていたのだろうか？一刻も早く記憶を取り戻さなければいけない事は明白だ。何せ皆が普通の事だと思っっている事が分からないのだから大変な事だろう。

しかしこのエネルギー体が普通に生息するものだというのなら一体何故彼女は驚きを見せたのだろうか？眼を見開き何か呟いていたのを覚えている。

それに彼女達が言っていたDシリーズ、No.25。その意味も知っておかなければならないだろう。

俺はその疑問を彼等に投げかけてみた。するとテツが驚いた表情を見せる。

「…本当に…記憶…全く無いんですね…驚きました…。説明するのは難しいですが…このDシリーズは…普段人が居る場所には姿を現す事が有りません…森の奥や…地下…人が踏み入れない場所に居るんです…。」

「…そうか！普段そんな場所にしか生息しないブルメリアがこんな場所に居る事が異常という事か。」

「はい…その理由は分かりませんが…普段住み慣れぬ場所に移住した結果…彼等は異常に警戒心が強まった…という事だと思います…」

テツの説明で一つの疑問が解決した。勿論根本的な疑問…何故エネルギー体の存在が在るのか…は分かっていないが、そんな事迄聞いていては何日掛かるか分からないだろう。故に目の前の疑問を一つづつ解決していかなければ。

そして二つ目の疑問にはユメが答える。ユメはその一点から視線を此方に向け、先程の様に博識な一面を俺に見せつける。

「この世界には人間、動物の他に「未知の生物 アンノウン」と呼ばれる生命体が存在しています。彼等は姿を消したり、他の生物に寄生したりする事で長らくその存在を隠していました。しかし最近になりその存在が立証されたのです。その種類は数えきれぬ程で未だ発見されていないものも沢山居ます。科学者達は彼等を 26の分類…例外も有りますが…兎に角それらに分けそれぞれに番号を振りました。その分類を示す文字がA～Zまでのアルファベット、分類内でのナンバーが1～の数字です。更に今回私達が遭遇したこのD25のように其々に名称が付けられ、世間一般にもその存在は広く浸透しています。」

アンノウン。新たな生物か。  
言葉で説明されると理解が難しいものがあるが、そんな事は言っていられない。

どうやら彼女の話からすると、このプルメリアというのが実態が無い性質も持っているだけであり、他のアンノウン達の中には姿を認出来るものも居るようだ。

しかし最近までその存在が世間に広まっていなかった事からすると普通に生活する中で意識して彼等に遭遇するのは稀だという事が分かる。つまり今、この瞬間はとても貴重な時なのだという事なのだろうが、俺にはその凄さの実感が余り無かった。なんせ姿が無いのだから…。

しかし随分ここで時間を潰してしまったような気がする。辺りは相変わらず闇に包まれているが、目的地が有る手前こんな場所で未知との遭遇の感動に浸っている場合では無い。

テツとユメはその目的を忘れているのか、何も無い空間をただじっと見詰めている。

別に彼等と仲間という訳ではないのだが正直な所、のけ者にされた様で嫌な気分だ。

この仮独りで行ってしまおうか？とも考えたがルルーの顔が浮かびその考えは捨てた。

ならば速く進まなくては。

「もう良いだろう。…珍しいのは分かるがそんなものに構っている時間が有るなら日が差さない内に進んでおいた方が良い。」

二人へと告げる。彼等は視線を此方にやり名残惜しそうに宙を見詰めるも自らの任務を実行すべく再び進行方向を向く。

よし、今の時間で大分身体の疲れが取れた気がする。これなら又結

構な距離を歩く事が出来るだろう。

もしそのプルメリアの姿が俺にも確認たのならもう少し長居した  
らうか…などと考えつつ歩を進めようとしたその時だった。

三つ目の疑問が頭に浮かぶ。

これは明らかにおかしい事、今までの話をどれだけ思い返してみてもその答えは見付からない。何故?という言葉しか見付からない。背後の二人へと視線を向ける。変わらぬ容姿で此方を不思議そうに見返すテツとユメ。その姿は人間に違いない。会話だって出来る。ならばどうして俺には出来ず彼等には出来る?

俺は恐る恐る口を開き、静かに問い掛けた。

「…お前達…何でプルメリアが見えるんだ…?」



『アンノウン』（後書き）

第3話と連続投稿になったので此方に後書きを書かせて頂きますね？  
実は今回の話は2回に分けようと思っていたのですが、上手く話し  
を区切る事が出来ず前回に比べ随分長くなってしまいました。  
読みにくかったかもしれませんが…すみませんでした；  
それに比べ前回はとても短い為、今後はなるべく文字数を統一させ  
ていきたいと思いました…。

## その身体

説明を聞いている間気付く事が無かったが：やはり変だ。

確かにあの空間には何も無い、何も見えない筈。しかし彼等はブルメリアをその眼で確認し存在を把握している。

嘘を言っている様子では無かったし彼等が嘘をつく理由も無い。ならば何故俺には見えない？何故彼等は見えている？

とつさに問う疑問にテツが不思議そうに此方を見詰め、一言。

「え…言いました…よね…お兄さんは純粹だから…って…」

純粹だから？

思い返せば確かにさっきの説明の中で彼が言っていた気がするが…やはり疑問は解決しない。

純粹だから何だ？むしろ疑問が増える。

一体何が純粹だと言うのか？記憶が無い事が純粹だと言いたいのだろうか。

「俺の何が純粹だって言うんだ？…お前達は純粹じゃないのか？」

何故こうも疑問が尽きないのか。自分に苛立ちを覚えて仕方が無い。生き抜く為に必要な記憶迄も無くしてしまった、ただ問う事しか出来ない自分に。

そんな事が頭をよぎる中、返答が告げられる。

その内容に俺は耳を疑った。

「何が？…勿論、貴方の身体の事です。正確に言うのなら貴方は純粹な『人間』故にその眼にはD25は映りません。」

純粹が示すもの、それは『人間』である事？何を言っているんだ？  
彼女は。

俺が人間である事は当たり前前の事、人間だからブルメリアが見えない？ならお前達は何故見える？お前達は人間だろう？容姿だって人間の姿、会話だってしている。

だがその言い方じゃあまるで…

「私達がD25が見える理由、それは単純な事。それは私達が純粹な『人間』ではないという事です。」

彼女の言葉の後、暫くの沈黙が続く。

ユメとテツ、彼等は『人間』では無い。彼女の言葉はそう告げていた。

二人を視界に映せど先程迄と全く変わらぬ表情だ。『人間』では無いものとは思えない、いや思いたくは無いというのが本音だった。微かに感じる恐怖。

思えば目が覚めてからこの恐怖に襲われてばかりだ。

人間では無いのなら一体何なんだ？

その疑問が得体の知れぬ恐怖へと変わっていた。

そして沈黙を破る様にテツが静かに告げる。

「……そんなに恐がらないで…下さい…ボク達は別に…人の皮を被った生物だ…なんて言いたい訳では無い…ですから…」

余程俺の表情は強張っていたのだろう、テツが心配そうな眼をして

いる。

彼に言われる迄もなく目前に居る二人が得体の知れぬ生物だとは思いたくは無い。

しかしプルメリアが見える、見えないの決定的な差が俺の心を揺さぶる。

「なら…何だつて言うんだ？」

自然と身体が警戒心を抱いているのが分かった。ユメの背中に光る刃が恐怖心を煽る。

確かに彼等とは1日にも満たない付き合いだ。まだ知らない事は沢山有る。むしろ知らない事ばかりだろう。

しかしまさかこんな場所で彼等の重大な真実を知る事になるとは思いもしなかった。

「聞かれたから…答えますけど…僕達が人間では無い理由…それは…」

テツが何か躊躇いながらも意を決したのか俺を見据え話し、そして徐に深く被った帽子を外す。

帽子の中から露わになったのは先程迄の印象とは違う長い黒髪、風に触れればその長髪が靡き微かだが大人びた印象を受ける。最初に目に付いたのはそれだった。

しかしすぐに不思議な感覚に襲われる。…何だ？彼の髪が月の光に照らされ光っている。

「…ボク達の身体には…『機械』…が組み込まれています…。…それが…『純粋な人間』では無い…理由。」

悲し気な瞳で彼が告げた。

最初はただ月の光が髪に反射しているものだと思っていた…しかしよく目を凝らして見ると何か光り方が不自然だ。そしてその髪に何故違和感を感じたのかが理解出来た。

「お…お前…髪が…っ…」

細い髪一本一本が微かな輝きを帯びている。その輝きは月の仕業では無く、暗闇の中で髪自体が電子的に輝いている。そんな馬鹿な事が有るものか…と内心では思うものの今目にはしているものは現実だ。驚く俺を見詰めつつテツは淡々と話しを続ける。

「ボクの身体の…至る所には…生きる為の様々な機械が組み込まれて…います…。この髪もその一つ…。ボク達は…生を得る代わりに…この身体を代償にしたんです…。」

衝撃的な言葉に俺は驚きを隠せなかった。彼等にそんな秘密が有ったなんて想像もしなかった。そして何時の間にか先程迄抱いていた恐怖は消え失せ、彼に見とれてしまっている自分が居た。

『ボク達』と言っている訳だからユメも同じ身体をしているんだろう。

彼女に視線をやると特に動揺する事無くただテツを見ていた。片目に巻いた包帯の下はやはり… そんな想像をしてしまう。

突然な事で何を言えば良いのか分からない。問いたい事は山ほどあるのに口が開かない。それも全てテツの姿の神秘的な姿が原因だ。

「ボク達がD25…プルメリアを確認出来たのは…眼で見ているのではなく…視覚の代わりに組み込まれた機械で見ているから…です…。」

彼は再び帽子を深く被り直すと遠慮がちに此方の提示した疑問に答えていく。

やはり理解し難い内容だったが、此程現実離れしている話しや出来事が続くと一々驚く事が馬鹿げている様な気がしてくる。

俺は返す言葉が見つからず、再び沈黙が訪れた。

しかしそんな馬鹿な事が有ってたまるか。

機械の身体？今日の前に居るのが人間もどきだと言うのか？冗談じゃない、誰が見ても人間じゃないか。

彼の髪と説明を目の当たりにしてもそんな否定的な考えが浮かび続ける。

しかしそれとは対象的な不安がよぎる。

彼らの様な機械が組み込まれた人間も他に居るのか？この世界ではそれが普通だとも言っのだろうか？

そんな事を繰り返している内、傍らに居るユメが沈黙を破り言葉紡ぐ。

「私達の事は貴方には関係は無いでしょう。全ても知ったとしても貴方に利益は有りません。∴それよりも早く町に向かった方が良かった。」

テツもその言葉に同意する様に頷く。

俺は現実に戻され、暗闇に包まれた世界が視界を包む。

ああ、そうだった。

俺はこんな場所で立ち止まっている訳にはいかない。彼らの事は気

にする必要は無いだろう。

ルルーが言っていた老人に会えばきっと全ての疑問が解ける筈。

俺はテツの姿に微かな恐怖を覚えながらも、この世界の真実を知る  
為に無言で歩き出した。

## 町にて。

「…本当にそれで良いのか？お前さんは若い…まだ希望は有るだろう…」

「そんな言葉で俺が考え直すとも思ってたのかよ？…希望が有ろうが無かるうが俺は俺のやるべき事をやんのさ。」

「…そうか…もはや何を言っても無駄の様だ…。…ならば行け、行ってお前の任を確りと果たしてくるのだ…」

「ああ、分かってるさ。…じゃあな。お互い生きてたら又逢おうぜ？」

あれから夜が明ける迄歩き続けた。

何と長い夜だったのだろうか？この数時間の間に俺は様々な事を記憶した。

この世界には俺達人間や動物、昆虫等以外に住む者達が居る事、それらには様々な種類が居る事…そして一番衝撃的だった、傍らに共に歩く彼等が人間では無いという事。

だが今の俺が知りたい事はそんな事じゃない。俺が求める物はただ一つ、俺は誰なのか、だ。

その答えを求め今俺はルルーから教えて貰った町を目前にしている。見た限りでは小さな静かな町、田舎の様なイメージを受ける。

しかし町への出入りの規制は確りしているらしく、恐らく門番なの



だろつ入り口の前には体格の良い男が二人、不審者を見る様な目で此方を見詰めている。

俺の後から付いて来る二人を確認した後、その門番に向かい足を進める。

「止まれ。お前達、見ない顔だが何者だ？」

案の定止められてしまった。

町を外敵から守る門番だ。当たり前と言えば当たり前なのだが、門番二人を間近で見るとその筋肉質な身体が一際目立ち、力ではかなわない事を理解させられる。

「俺達は怪しい者じゃない。」

疑いを掛けられる事は何か嫌なものだ。身分を証明する物が有るにも関わらずとつさに言葉を返す。

「怪しいか怪しくないかは俺達が決める事だ。今の事世界の状態は知っているだろつ？無闇やたらにお前達の様な奴を町に入れる訳にはいかんのでな。…何者かを証明する物が無いのなら悪いが此処から立ち去って貰おうか。」

鋭い眼孔が俺達に向けられている。この俣では町に入る事は無理、ならばあれを使うしか無いだろう。

懐から折り畳んだルルー直筆の紙を彼等に見せ付ける。

これでこの町に入れる筈。そうしたら次はシールという老人を探さなければならぬ。顔を知らぬ人物を探すのは一苦労だが、この町の大きさは見付かるのは時間の問題だろう。

などと考えつつ俺は紙に目を通す門番達を見詰め、返事を待つ。

「ルルーレイン…ああ、あの馬鹿な研究者か。奴の知り合いなのか？お前達。」

門番の一人が馬鹿にした様な笑みを浮かべながら此方に問い掛ける。すると突然、その言葉に反応する様に俺の背後から声が飛ぶ。

「ルルー様は馬鹿では無い！…お前達が馬鹿なのだ…」

ユメが悲しそうな表情で彼等を見据えていた。

ルルーが馬鹿？どうやら門番の彼等はルルーの事を知っているらしい。しかし慕われている様子は無い、というか馬鹿にされている様だ。

どうやら彼等町の間とルルーの間には何か有るらしい。

ユメの言葉を聞いて門番達は不機嫌そうな表情を浮かべている。この俣では不味い、町に入れて貰う事が出来なくなってしまいかもしれない…そう思った瞬間、次はテツが遠慮がちに門番に告げる。

「あ…すみません…僕達は…その紙に書いてある通り…ルルー様の元から…来ました…。もし…それでも疑うのなら…今直ぐにでも連絡を取って貰えれば…分かる筈です…。」

門番達はユメに何か言いたそうだったがテツに雰囲気を乱された為か渋々といった様子で道を開ける。

「本当はあの馬鹿の知り合い等入れたく無いんだがな…ほら、さっさと通れ！」

どうやら俺達の身分は証明されたらしい。馬鹿と言われながらもルルーはやはり信用はされている様だ。

俺は安堵の表情を浮かべ門番達の前を通る。

再び馬鹿と言われた為か彼等をユメが睨んでいるがテツがこの場から早く逃れたいとばかりに彼女の背後から急かしていた。

町の中に進むとやはり早朝の為か人はまばらにしか居ない。しかしこの時間からも既に開いている仕事熱心な店も幾つかあり、そこに視線をやると様々な物が売られているようだ。多少では有ったが手持ちの金は有った筈、食料は此処で調達出来る。

町を見渡しているとユメが俺に向け口を開く。

「先程は申し訳ありませんでした…少し感情的になってしまい危うく私のせいで町に入る事が」

「謝る必要…無いよ…？もし…ユメが言わなかったら…ボクが言っていたと思うから…。…それに…ユメが言ってくれて…スッキリしたし…。」

言葉に割って入る様にテツがユメを向け告げる。その表情は何処か満足そうだ。

その言葉を聞くもユメは申し訳無さそうな表情の俣だった。

余程自分の無責任な発言を悔いているのか、それともルルーを馬鹿にされた事を未だに気にしているのか。

兎に角町に入れたんだ、そんな話はもう気にはしない。早速シールと呼ばれる老人を探さなければ。

そう思い立つとテツが次は此方に告げる。

「…ボク達は…此処でお別れ…です…この町でやる事が有るので…自分探し、頑張ってください…」

突然の話に俺は戸惑うも記憶を振り返れば彼等は町迄の付き合いだと始めに聞いたのを思い出す。

そう言えばテツとユメは俺をその場に置き去りにし、町の中へと消えて行く。

微かな孤独感に襲われ、俺は暫くその場に立ち尽くしていた。

この俣此処に立っただけでも仕方無い。

取り敢えず視界に映る町の住民からシールと呼ばれる老人の家の場所を聞き出さなければ。

しかしやはり町の外から訪れた者だと分かるのだろう、訪ねようと町人に近付くと俺を避ける様にその場を離れていってしまう。

俺はそんなに怪しい人物に見えるのだろうか？などと考えながら溜め息を吐いた。

余所者には厳しいと門番が居る時点で覚悟はしていたが些細な会話も出来ないとは思ってもみなかった。まあこんな時間だからというのも有るのだろうか。

仕方無く近くに見える店に向かった。店を開いている以上、客から逃げる事は無いだろう。

「すまないが…シールという人物の家を教えて貰えないか？」

案の定店に居る男は俺の言葉を聞いてくれた。そして男は気さくに笑いながら俺に向けて告げる。

「アンタ、旅のモンかい？ そうだな、俺の店のモン何か買ってくれたら教えてやるよ。」

商売上手な奴だ。冗談の様には聞こえたが俺は一刻も早く探し人の元に行きたいが為になけなしの金で手元に有ったナイフを買った。護身用位にはなるだろう、とそれを懐に忍ばせる。

そして俺は再び店の男に問い掛けた。すると男は幾件かの家の先に見える青い屋根を指差す。

「あそこがシールさん家だ。…此処だけの話、あんまりあの爺さんと関わらねえ方がよいぜ。」

あの家が探し人の家だという事は分かった。しかし彼が次いで告げた言葉に俺は疑問を抱いた。今から会う人物と関わるな、など何を言っているのか。

不思議そうな顔をする俺に店の男は小声で話す。

「あの爺さんがXの事に詳しいってのは有名な話だろ？アンタもその事を知って会いに来たんだとは思うが…実はXと今でも関わりが有るらしい。」

男はとても重大な事をする様に深刻な表情で告げる。しかし俺の様な見知らぬ者にその話をするという事は秘密でも何でも無い、ただの噂なのだろう。

だが彼はXと関わりが有るというだけで危険な人物だと決め付けている様だ。きつと町の皆もそう考えているのだろう、指で示された家の近辺にはやけに人気が無い。

俺はその話に上辺だけの驚いた表情を見せ、礼を言いその場を後にした。

目標が定まった為に足取りが軽くなる。一人残された孤独感から、自分を知る事が出来る期待感に変わっていた。

店からは少し遠いと思っていたが、歩いてみると思ったよりも近くに感じる。

ああ、シールとはどんな人物なのだろうか？俺を知っているのだろうか？

不安、緊張、期待が入り混じった心境の中、俺は探し人の家の前へと辿り着いた。

老人…そして。

扉に手を掛けると鍵は掛かっていなかったらしく何の抵抗も無く開いた。

まだ街に活気が溢れるには早い時間帯だが目覚めている者は目覚めているだろう時間だ。きつと此処の家主も既に起床している筈。もし施錠されていたのなら時間を置いてみるつもりだったがその必要も無い様だ。

無駄な時間が省かれ助かるのだがやはり緊張は更に高まってくる。しかし僅かに開いた扉の隙間から屋敷内を覗くと人の気配は無く、此処から見える廊下に灯りは無く闇に包まれていた。

この家がシールという人物の屋敷だという事は間違いは無い筈。俺は扉をゆつくりと開き玄関へと踏み入れた。そして一言。

「すみません」

誰かが居るのなら顔を出すだろう、そう思い遠慮がちに告げたその言葉は静かな屋敷に響き、そして何の返答も無いまま幾秒かが過ぎる。

どうしたんだ？誰も居ないのか？

まさか戸締まりもせず眠るなんて事は有るまい、ならば家主は一体何処へ。

僅かな不信感を抱きながら再び屋敷に先程と同じ言葉を投げかけるもやはり返答は無かった。

この屋敷内に自分の記憶を取り戻す為に必要な人物が居るというのに。

しかし玄関で立ち尽くすもどかしい時間は刻々と過ぎていく。

折角1日歩き続けこの家に辿り着いたというのに…此処に待機している自分が馬鹿らしく感じてくる。

まさか本当にまだ眠っているのではないのか？Xと関わりがあると噂されている時点で僅かながらも危険が有る筈だろう、なのに施錠もせず眠る等有り得ないとは思うがまさか…。

否定出来ぬ考え故にそれを確認する事が出来ないのが辛い。

確認する術が無いのが現状だ。これを打開するには。

「お邪魔します…」

俺は屋敷内に歩を進めた。勝手に侵入するのは悪い事だとは分かるが今の俺にはそんな事はどうでも良かった。

投げかけたその言葉にもやはり誰も応える事はなく、既に俺の勝手な侵入を許してしまっている。

暗い廊下を照らす灯りを探そうと手探りで壁に触れる。指先に硬いものが当たり、それを押すと廊下だけでなく家全体が明るさを帯び、屋敷の雰囲気が一変した。

灯りがあると何か抵抗がある。勝手に侵入していいものだろうか？何だか泥棒にでもなった気分だ。

その時だった。

「…お客さんか？」

背後から聞こえた沈黙を振り払うその言葉に一気に身体が硬直するのが分かった。こんな場面を見られたら本当に泥棒に間違われるかもしれない。



振り返り誰かを確認したいが冷や汗が頬を伝い、相手を見る事に恐怖を感じた。

俺はそのままの体勢でどうする事も出来ないでいる。

しかしふと頭を相手の言葉がよぎる。

お客さんかい…？

普通なら「誰だ」とか叫びを上げる筈。肝の据わった大男でさえもそれ位は言うはずだ。

更に疑問に感じたのは相手の声色。何とも穏やかな、一切の恐怖心を感じていない老人の声。

老人の声…？

まさか！

俺はとっさに振り返り背後の相手を視界に収めた。

「ルルーの所から来た奴だろう…話は聞いている」

視界に映るその老人は白髪であり、しかしどこか威厳のある風貌。此方が言葉を掛ける前に先に相手が告げる。

ルルーの事を知っている、つまりこの老人が

「…シールさん…ですか？」

先程の冷や汗は引き、確信と共に問う。

此処はシールの家だ、此処にシールが居るのは当たり前なのだが。

「人の家に勝手に入って問う事か？」

老人は怖がる様子も無く、玄關に立ったまま此方にそう告げる。確かにそれはそうだ。冷静に返された言葉に納得すると共に先程迄の嫌な緊張が消える。

このまま此処に立ち尽くしているのは失礼だろう、と考えていると老人は此方を気にする事無く俺の目の前を通り過ぎ屋敷に進んで行く。

やはりただ立ち尽くす俺に老人は一言。

「…こつちに来て、自分が知りたいんだらう？」

この老人は俺の記憶の鍵を握っている。その一言でそう確信出来た。

俺は老人、シールの後に続き屋敷内へと姿を消した。

「此処で待っていないさい。」

俺が連れてこられたのは多分客を招く為の部屋なのだろう、大きな絵画や高価そうな置物がある。絵画には片隅に「シール」と書かれていた。この絵はシールという人物、つまりこの家の主、あの老人の事だ。

適当な椅子に腰掛ければその雰囲気に再び緊張を覚える。思い描いていた人物はもつと腰の曲がった老人だったが、俺が視界に映した人物の風貌はそんな事は無く、更に此方の緊張を煽る。

くただ座っている事にこんな緊張する事はおそらく今までに無かつただろう。まあ記憶が無い異常推測でしかないのだが。

暫く待っていると老人が再び俺の前に姿を現す。

緊張に言葉が出ない。

「あ…あの、俺は…」

此方が先に声を掛けるがその言葉ははつきりしたのではなく、暫く声を出していなかった為に微かに掠れその先が続かなかった。老人は何も言わず机越しに俺の目の前の椅子に腰掛ける。その手には何かを持っていた。

「君の事は聞いているといったらろう？…そんなに緊張する事は無い、一度深呼吸をしたら良い。」

秀囲気でやはり緊張している事が分かるのか。俺は言われたとおり深い深呼吸をする。胸の中の嫌なものを吐き出す様に深く息を吐く。

想像していたより随分と軽い人物かもしれない。そう考えるだけで少し緊張が和らいだ。相手の表情には微かだが笑みが浮かんでいる。

「…俺の事を教えてください。俺はその為に此処に来ました。」

緊張が解れると相手の顔を見遣り深刻な表情で直ぐに問う。ルルーの場所から一度も敬語を使っではないが、使えない訳ではないらしい。こういう場では敬語の方が良いだろう。それは勿論少しながら緊張していたせいでもあるのだが。

「ああ、その事は君が来るまでに調べておいたよ。…ルルーからの話だと君はXと関係が有るらしいが…」

見ず知らずの俺の事を調べるなど余程の信頼する人物の願いではないとやらないだろう。それだけルルーはこの老人に信頼されている

という事か。この町に入る時に門番が言っていた言葉が嘘のようだ。俺は相手の問い掛けに静かに頷いてみせた。すると老人はおもむろに手元にある物を此方に差し出す。

「名簿だ。顔写真が有る。君が記載されているかもしれないと思っ  
てね。…本当の事を言うと、此れ位しか調べる方法が無かったんだ  
が。」

差し出されたそれを手に取る。此だけでも十分なものだ。普通では  
低は居る事はないものだろう。

俺は大きな期待を胸にその名簿を開く。

「…？」

そこには多くの人物の顔写真が載っていた。その人物がどのような  
人物なのかも確りと記載されている。身長、体重、生い立ち。此れ  
だけ見ればその人物の事が分かってしまう、それだけ此れが貴重な  
ものだという事が理解出来た。だが一つ引っかかる事が有る。

名前：アートン・リバー

身長：176.4cm

体重：78.1kg

最初ページの人物のものだ。

これだけ見ると普通の名簿なのだが、下の方迄見るとこつ記載され  
ていた。

『抹消済』

どういう事だ？その単語の意味が理解出来ない。他のページを見てみると同じ場所に同じ単語が書かれている。抹消されたという事なのだろうが、一体何から消されたのか？Xのメンバーから脱退したという事だろうか？

疑問符を浮かべながらその真意を問おうと目前に居る老人を見遣る。老人は微かな笑みを絶やさぬまま此方を見ていた。

「…この資料の此処の言葉、どういう意味ですか？抹消済と書いてありますが…」

名簿に記載されているその言葉を指差し相手に見せながら問い掛ける。この老人ならきっとこの意味が理解出来るだろう。

「ああ。『抹消済』というのはね、消えたって事さ。」

老人は当たり前前の様に告げる。

そんな事は分かっている、抹消という事はつまりは其処から消えたという事。俺は文字の意味を聞いている訳じゃない。

「いや…そういう事を聞いているのではなくて…」

更に追求しようと老人に再び問おうとした時だった。

「そういう事だよ。消えてしまうのさ、君だって。」

「は…！？」

それは突然の出来事だった。

背後から誰かが俺の口へと布を押し付けてきた。とっさに俺は抵抗を見せるが強烈なその匂いに俺は何が何だか分からぬ仮意識が朦朧

としてくる。

抵抗する暇は無かった。明らかに強すぎる力で俺を押さえつけている為だ。

何が起こっている？俺はただ老人にXの名簿を見せて貰っていただけ。今の状況の意味が理解出来ない。

俺が消えてしまう？抹消済の意味が理解出来ない俺にとってはその言葉に意味さえも理解出来ない。

しかしただ一つ分かるのは、今この瞬間、俺は誰かに襲われ、それにこの老人も関わっているという事だった。

どうやら思考を鈍らせる薬品が含ませてあるらしく景色がぼやけてくる。口を塞がれている為に声も出せない。

薄れ行く意識の中、唯一視界に確認出来た老人は未だ、微かな笑みを浮かべていた。

「…消えてしまうのさ。皆、ね。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6019c/>

---

NEO WORLD

2010年12月11日03時37分発行